



多田 敦

出来るか出来ないかは別として、目標がないと安心せず、子年のせっかちさと人のよい辛抱強さを持つがために、走りながら考え、出来なくても目標を夢として持ち続けるという、おめでたい性格にもかかわらず、学系はじめ周りの皆様に支えられてなんとかやって来られたことに感謝している。ここでは、自分の目標とした研究が時期別にどのように変わって来たのかを振り返ってみたい。

(1) なぜ農地工学、土を選んだのか：なるべく楽しく、一生好きなことをして過ごしたいのが目標で、それには小さいことでもよいから人の役に立つこと、また、人間から離れないのがよい。これが土壌という対象を選びながら、農業に係わる土木学、圃場を扱う科学を選択することになった理由である。応用技術研究を目指しながら、その基礎学として土壌物理学を選び、技術との結びつきとして農地工学を選んだ。学生の夏期実習で北海道へ行き、たまたま重粘土とその改良工事に出会ったのも後の専門に深く影響を及ぼした。

(2) 大学院生としての目標：研究者として仲間に入れてもらえること。当時、研究室では、関東ロームの水分系に関する科研の総合研究が始まろうとしており、恩師山崎不二夫教授は、筆者が院生であっても同等に共同研究に参加させて下さり、先輩研究者の教官方もその中で教育してくれた。力量が最も低い院生一年生が共同研究の一員としてやってゆくためには、自分の個性、独創性を出し、弱くてもどこか特徴がなければならない。終電まで実験し、夜の間を考え、翌日の午前中に論議してもらった。前夜は良い考えだと思っても論破されてしまう。生き残る考え方は個性に基づいた独創的な部分であったし、それを大事にしたいと思った。忙しい中、教官方はよく辛抱してくれた。また、自分の研究課題のみではなく、現地水田の浸透、重粘土や泥炭の排水等フィールドに係わることには何にでも関心があるので、手伝いながら、室内・現地の試験や調査からいろいろ学んだ。

このように恵まれた環境は、自分の学生たちにも用意してあげたい環境であった。これからの研究目標は、土壌の種類別の特徴と適用工法で、土壌学と工学の結合、土壌工学となってきた。

(3) 勤務期間の目標（農水省農業土木試験場～現農業工学研究所および筑波大学）：学生の9年間は大学の研究を学んだので、技術に関する研究をする以上、農水省の技術者がやっていることも自分の身体で知りたく、農土試に就職させてもらった。配属は土地改良部で、水田の用排水、整備等の研究を担当した。ここは農水省のこれら事業の技術的裏付けに責任があるので、フィールド研究をやるには面白く、当初の目標は居ながらにして達せられる環境にあったが、全国からの来客や電話相談も多くて忙しく、ついには便所まで人が着いて来るほどになってしまった。専門分野の中核研究機関であるので、各地から多くの情報が寄せられる。研究者としての自分は、これらをどのように整理し、処理してゆけばよいのかの方法探しが大学とは違った目標になった。この間に考えたのが土壌工学で、土壌生成因子を工学的に拡大利用して農地の問題に適用してゆくことを考えた。この課題には、一つの試験地で時間を掛けた調査が必要であり、若い人の協力も不可欠であると考えて、おりよく誘って下さった筑波大学にお世話になることになった。

筑波大学に移ってまず経験したことは、大学と研究所の違いであった。大学の役割には研究の他に教育がある。学類生、院生それぞれへの対応の区別、教官一人ひとりの研究・教育哲学の把握など考える余地もなく、皆同じ対応で走り出した。現地調査と室内試験との組み合わせが必須な研究対象・手段を実行するには、教育との係わりの中で理解を得、解決をはからなければならない点が多い。現地と室内の両仕事を続けながら、この解決が目標となってきた。プロの研究者ではない学生には十分な心の理解を得ないと進まない。例えば、ある測定に習熟した学生に、全く経験のない教官がかかえるわずかな数の試料の測定を頼むとき、なぜ彼が他人の測定をしなければならないのか時間をかけての説明が必要になる。現地調査に関しても、本人は参加の納得をしていますが他の学生が強制だといってくる。機会をつかんで知見を与え、経験させるために、圃場や土壌試料などの適当な材料がある時に一人ひとり選択しながらの教育となるので、全員に同時・同一に機会を与えることが出来ない。気の遣い方は大変である。しかたがないのでだんだんと学生の希望を中心に、こちらが合わせるようになった。このため、教育目標は多様化され、研究目標や結果の集中は出来なくなった。その分学生はのびのびやり、部活、就職試験の合格率などプラス面もでた。筆者自身にとっても、結果の整理など現在も宿題を山ほどかかえて、生きがいになっている。研究と教育の兼ね合いとはむづかしい。その他いろいろの解決が必要になった。

通常の実習、インターンシップの利用など方法の工夫はあったであろうが、宿題のまま残してしまった。それでも研究と教育の場にいた幸運で、現在でも卒業生や先輩・後輩から相談や報告があり、つくば地区で以前から続けている月に一度の専門のゼミにも参加し続けている。これらは、筑波大学に勤務できた財産である。

(4) 現在の目標(退職後) : 研究目標にしながらこれまでに出来なかった宿題を少しでも埋めて行きたい。

このように振り返ってみると、学類や大学院の改名・改組など他にも目標はあったものの、自分個人をめぐる目標は変わっていない。進歩がないという事かもしれない。残された時間で決着をつけないと夢だけで終わってしまう。毎日歩くというリハビリに心掛けながら、時間を大切に使いたい毎日である。皆様、ありがとうございました。